2 史伝

単元のねらい

本単元は、「漢文入門」で学習した知識を確かめながら、応用力を養うことをねらいとしている。次の七点が学ぶべきこととなろう。

(1) 本文を繰り返し音読・朗読することによって、漢文特有の表現にいっそう親しむ。

(2) 受身・疑問・反語・抑揚・使役・比較・選択など訓読のきまりを理解し、主語―述語などの文の構造を意識しながら平易な現代語訳を工夫することによって、漢文の世界に親しむ。

(3) 史伝の歴史的・文化的背景を調査することによって、史伝に表現されている国と国との関係や人と人との関係などの理解に役立てる。

(4) 史伝の構成・叙述や展開を正しく踏まえることによって、内容を的確に理解する。

(5) 史伝と古典に関する文章（史伝文学）それぞれに描かれた躍動的・個性的・独創的で多彩な行動やものの見方・考え方をする登場人物を比較することによって、人（個人）の生き方や能力についての考えを広げ深めたり批判したりする力を養う。

(6) 史伝の登場人物を紹介する言語活動によって、史伝の内容を的確に解釈するとともに歴史観や人生観を問う契機とする。

(7) 史伝の登場人物を紹介する言語活動によって、自分のものの見方・感じ方・考え方をさらに深め、文章の構成・展開や文体・表現の仕方・表現の特色について評価する力を養う。

単元の構成

本単元は「十八史略」の中から「先従隗始」「鶏口牛後」「管鮑之交」「臥薪嘗胆」の四編を選んだ。この時期の生徒は、入門期を過ぎたばかりで、まだ訓読や内容読解に慣れていない。このような段階での学習には、比較的短い話で基本的な語法（句法）で表現され、現代語訳・内容読解がしやすく、話の内容が面白くテーマが分かりやすいものが適切と考え、そのような教材を選定した。当然、これら四編を短い話から長い話へと配列することが適当と考えた。

古典に関する文章は、史伝の読みを広げたり深めたりするために適したものという視点で選び、漢文教材の後に配置した。そのようにしたのは、史伝と古典（漢文）に関する文章（随筆・小説など）を読み比べたり、比較して論じたり批評したりする言語活動がしやすくなると判断したからだ。そこで、「臥薪嘗胆」の話をもとにした史伝文学である「中国英傑伝」の中の一節が適切と考え、採録した。

「登場人物を紹介する」言語活動は、その題材の内容理解をさらに深めたり自分のものの見方・感じ方・考え方をますます広げたりすることや、文章の構成や展開・表現の仕方・表現の特色について評価する力を確かなものにすることに、その目的がある。それを達成するためには、単元の最後で、この単元で学んだ教材を用いてこの活動をすることが適切と判断し、そのようにした。また、教材に登場する人物が躍動的・個性的で多彩を極め魅力的なので、「読むこと」の言語活動がしやすいとも考え、登場人物の魅力を紹介する「紹介文」を書かせることとした。